

良導絡の概要

ノイロメーター使用法

目 次

ノイロメーターを使用されるに当って	(1)
良導点・反応良導点・反応不良導点・良導絡	
代表測定点・興奮点・抑制点・まとめ	(1)
良導絡図	(5)
ノイロメーターの一般的な使用法	(14)
(1) 反応良導点の探索	(14)
(2) 良導絡の測定	(15)
カルテの記入の仕方	(16)
代表測定点のとり方	(17)
生理範囲の出し方	(19)
(3) 電気の体内導入	(19)
(4) その他の利用法	(19)
良導絡治療法	(20)
(1) 反応良導点治療法	(21)
(2) 全良導絡調整法	(23)
良導絡症候群	(24)

は じ め に

『内臓の異常は体壁に反射される。』

これはマッケンジーの原理であります。従って適当な方法があれば、体壁で病状診断は可能であります。また、これとは逆に体壁に加えられた刺激が内臓に反射されるかどうか、即ちマッケンジー原理の逆理であります。もし之が事実でありますと体壁で病体治療が可能になります。然しこれはまだ論じられておりません。そのようなときに、京都大学医学部第二生理学教室中谷義雄博士は、笹川久吾教授のご指導を得て、皮膚通電抵抗を介してこの問題に取り組まれ、皮膚通電抵抗測定器をはじめ、良導絡専用カルテなどをつぎつぎと考案されつつ、実験研究を重ねられて良導絡理論を発表されました。

従って、良導絡理論はマッケンジーの原理及びその逆理を検証するものであるというべきものでありまして、従来、近代医学が盲点としていました自律神経系の研究に、大きく一步を踏み出すもので、計測を武器とする実験例をもって、今まで不可解とされていた東洋医学を解体し、その長所のみを近代医学に採り入れることが出来るようになりました。

又、皮膚電気抵抗理論の研究も進むにしたがって、皮膚通電抵抗測定器（ノイロメーター）も一段と精巧なものが出来るようになり、内外の基礎医学者ばかりではなく、臨床医家に良導絡理論、良導絡治療へ興味をそそる結果となり、東西両医学の垣根は難なくとり除かれ、従来、東洋の神秘とされた治療法も、合理的に近代医学にとり入れ、近代医学の治療範囲を一段と拡大することが出来るようになりました。

ノイロメーターを使用されるに当って

ノイロメーターは皮膚通電抵抗測定器と呼ばれ、良導絡理論に適合して製作された皮膚電気抵抗測定器であります。

本器を使用されるには良導絡理論を理解して戴く必要があり、良導絡理論が即ち本器の使用法の重要な部分になっております。

ノイロメーターの各機種それぞれの操作方法につきましては、別冊の使用説明書をごらん下さい。ここでは各機種に共通な良導絡治療に関する部分をご説明いたします。

良導点 非発汗時に、ノイロメーターの握り導子を片手に握り、探索導子を皮膚にあてて電流量を調べてみますと、皮膚の表部角質層は不良導体であるにもかかわらず、電流がよく流れる点を発見することが出来ます。12Vで調べてメーターの針が振れないときは、ボルトをあげると良く判ります。このように、非発汗時に、皮膚上で、周辺と比較して特に電気がよく流れる点を良導点といいます。一つの良導点は大体毛穴ぐらいの大きさで、直径僅か1%にも達しません。

良導点の出来る成因は、良導絡理論によれば、内臓—皮膚自律神経反射で、皮膚に分布している交感神経の興奮性が高まっている由縁であるといわれています。また皮膚上のどんな微小な疵もよく電気を通しますが、これは良導点と区別していただく必要があります。

反応良導点 内臓に異常がありますと良導点は著明に現れます。内臓やその他の疾患によって著明に現れている良導点を特に反応良導点と呼んでいます。

通常、12Vで探索して現われている良導点は反応良導点と考えられています。反応良導点はすべて治療点となりますが、反応良導点は内臓—皮膚反射によっておこるばかりでなく、内臓—内臓—皮膚反射、又は皮膚—皮膚反射等によっても現われますので、どの反応良導点に刺

激を加えても同様の効果があるとは考えられません。よく効く反応良導点の現れる部位は経験的に判っていますので、そうした部位に反応良導点が現れたときに最も効果があるといえます。

反応不良導点 反応良導点は神経性反射によっておこっているのです、興奮がある限度を越しますと逆に麻痺してしまいます。神経が麻痺してしまいますと反応良導点とは逆に電気を通さなくなります。このように電気を通さなくなっている反応点を反応不良導点と呼びます。反応不良導点は疾患が慢性化する程多くなると考えられています。

反応不良導点は他の反応良導点を治療しているうちに良導点が変わってきたり、またボルトをあげると良導点になったりします。そうしたときに治療するようにします。このことは、外観上はあたかも反応良導点が移動するように見えますが、移動したものではありません。

良導絡 内臓疾患は、反射理論にもとづいて体壁に反射され、多くの良導点を現出していますが、反射される部位、即ち良導点の現れる部位は疾患によって大体決まっております。したがって統計的にみますと、疾患特有のパターンを発見することが出来ます。そしてこ

れらのパターンを良導絡と呼んでおります。現在良導絡は手に6本、足に6本、左右24本発見されております。また、疾患との直接関係はわかりませんが、身体の前後の正中線もパターン化してこれを合わせると26条になります。

良導絡はすべて符合で呼んでおります。手の6本はH₁~H₆、足の6本はF₁~F₆。良導絡、前の正中線をVM、後の正中線はHM良導絡と呼びます。

更に良導絡中の主な良導点には手足の末端から番号をつけております。H₁2とありますと、H₁良導絡の手の先端から2番目にある重要な良導点ということでありませぬ。

良導絡と内臓との関係

H ₁ 良導絡	肺臓	F ₁ 良導絡	脾臓(消化)
H ₂	血管・心嚢	F ₂	肝臓(生殖器)
H ₃	心臓	F ₃	腎臓・副腎
H ₄	小腸	F ₄	膀胱
H ₅	淋巴管	F ₅	胆嚢
H ₆	大腸	F ₆	胃

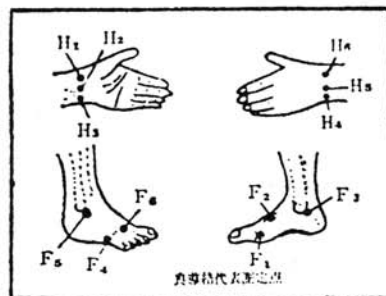
代表測定点 良導絡は内臓疾患の反応のパターンでありますので、それ等の興奮度を計ることが出来ると病状を知るのに極めて都合が良いわけであります。

皮膚通電抵抗を介して、その興奮性を測定するにはどうすれば良いか、つまり、ノイロメーターでどのようにすれば測定出来るのでしょうか。又、単に良導絡内の反応良導点の数を調べたり、反応良導点の現れている部位を調べるのも一つの病状診断方法かもしれません。更に良導絡内の主な良導点の通電量を計り平均を出す方法も考えることが出来ます。然し、前者は漠然としており、後者は煩わしいことあります。

良導絡では同じく平均値を利用するのですが、良導絡が時間、刺激部位、刺激量によって変動するので、平均値もまた変化しますが、その平均値の変化と同じような変化をする同一良導絡内の主な良導点の測定値をもって代用することにしてあります。従って測定値と平均値は一致しませんが、ベースを上げたり、下げたりすることで平均値を得ることが出来るわけで、同じ性質をもっていると考えることが出来ます。このような良導点を代表測定点と呼んでおります。代表測定点は各良導絡に1個ずつあるわけです。更に測定に便利のように許容差内にあることを目安に手首、足首のものを採用しております。

代表測定点は図のように左右24個あります。

代表測定点の位置



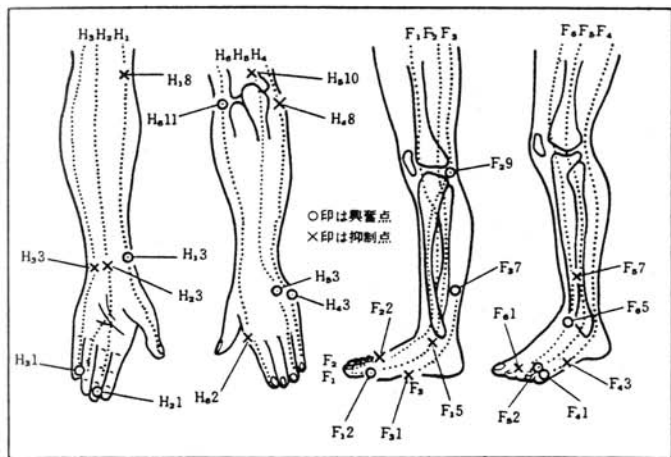
代表測定点の記号

H ₁ …… H ₁ 3	F ₁ …… F ₁ 3
H ₂ …… H ₂ 3	F ₂ …… F ₂ 3
H ₃ …… H ₃ 3	F ₃ …… F ₃ 4
H ₄ …… H ₄ 4	F ₄ …… F ₄ 4
H ₅ …… H ₅ 4	F ₅ …… F ₅ 5
H ₆ …… H ₆ 5	F ₆ …… F ₆ 4

興奮点・抑制点 良導絡理論では疾患の治療に刺激を用います。即ち、刺激によって良導絡の興奮性を調整いたします。興奮点は、良導絡の興奮性が低いときに、その興奮性を高めるために刺激する点であります。抑制点は逆に低くするために用いる刺激点であります。

良導絡内の良導点はそれぞれ拮抗作用をもっています。良導点を刺激しますと必ず興奮しますが、良導絡に与える影響はそれぞれ異なっていますので、良導絡の調整に利用することが出来る訳です。

興奮点・抑制点の部位



まとめ

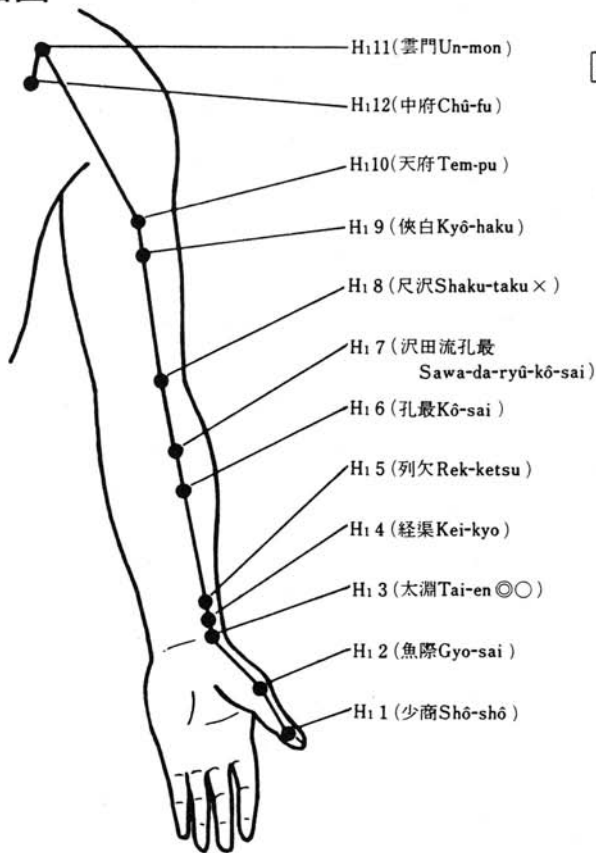
人体の皮膚に電流を流しますと、(不関電極を手を持って関電極を皮膚に当てるとその間に電流が流れます。)発汗時はよく電流が流れますが、非発汗時は、角質層が絶縁体でありますので、電気は流れませんが、電流が強くと絶縁が破壊されて、どこでも電気が流れます。その電流をだんだん弱めると、今までどこでも流れていたものが、だんだんと流れにくくなって、流れる場所が面から点にかわってまいります。そうした点が良導点でありまして、その時の電流が、ノイロメーターの電流であります。大体3V~24Vぐらいまでを使用しております。

こうして全身に現われる良導点を、医学的に分類して12組に分け、良導絡としています。次にあります良導絡図では良導絡内の主な良導点を線で結んで、あたかも線上に良導点があるようになっていますが、皮膚上にも皮下にもそのような線がある訳ではありません。皮膚上にあるものは点のみです。

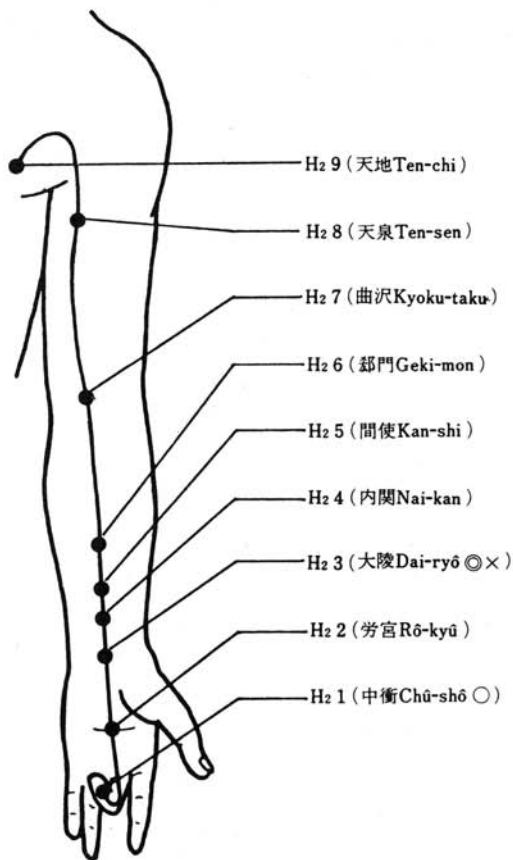
また、興奮点、抑制点は自律神経の拮抗性を利用した治療点であります。自律神経には恒常性もありまして、刺激に対して、興奮性の高いものは低く、低いものは高くなる性質をもっています。この性質を利用して、後掲の電気針治療点を用いることも出来ます。

良導絡図

H₁
肺 経

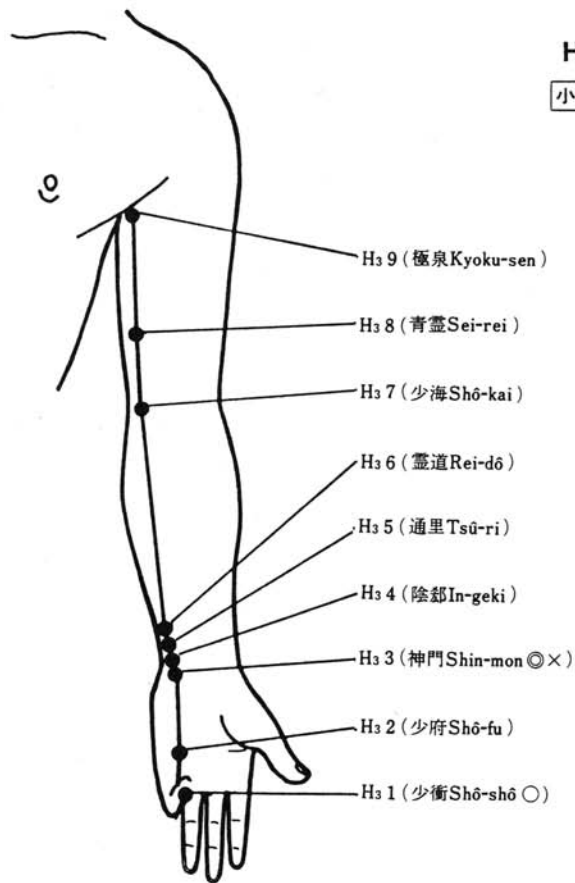


H₂
心包経



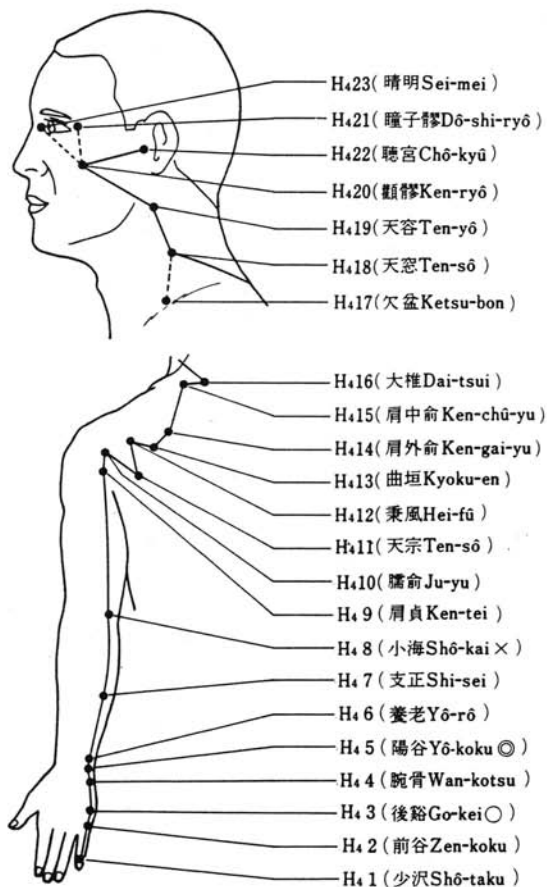
H3

心經



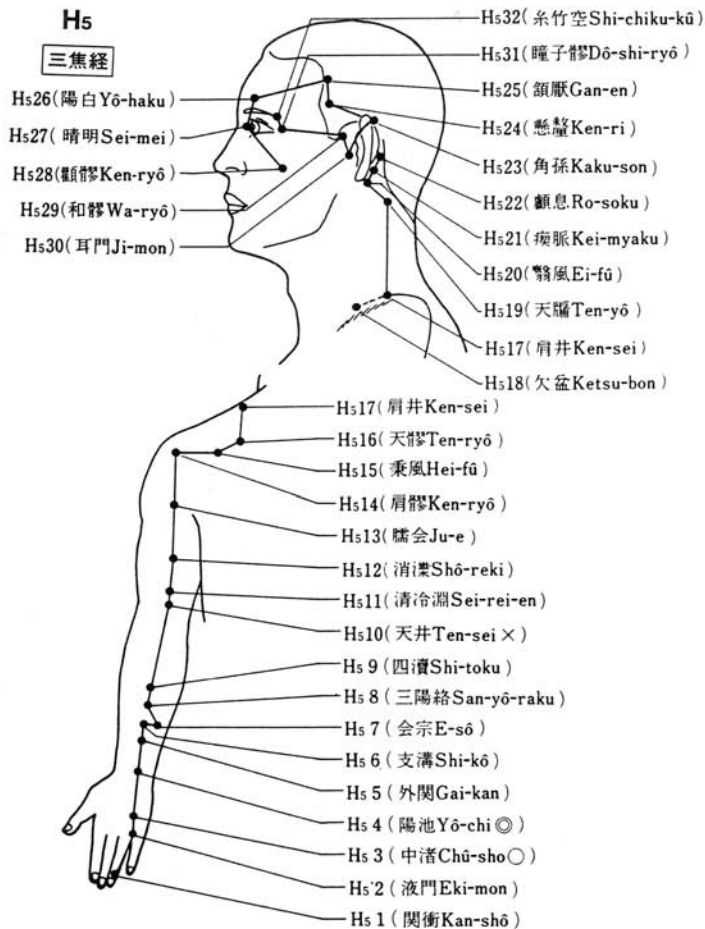
H4

小腸經



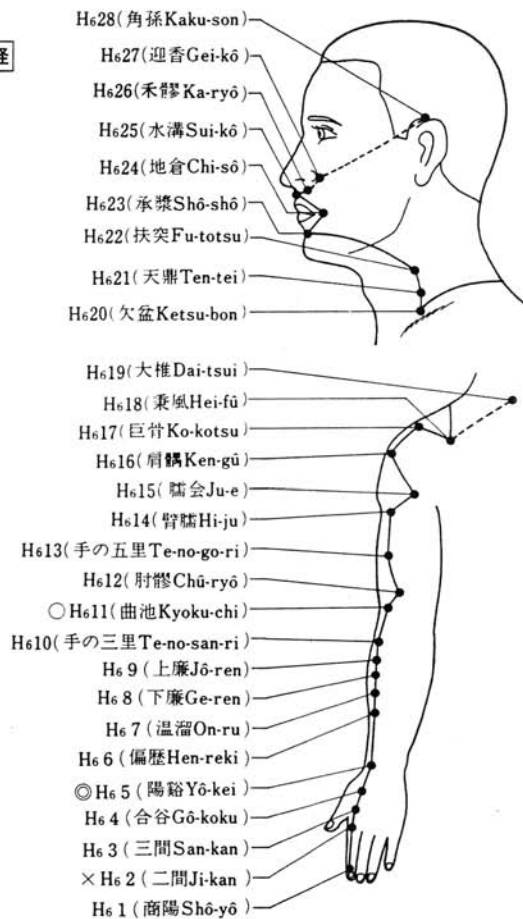
H5

三焦經



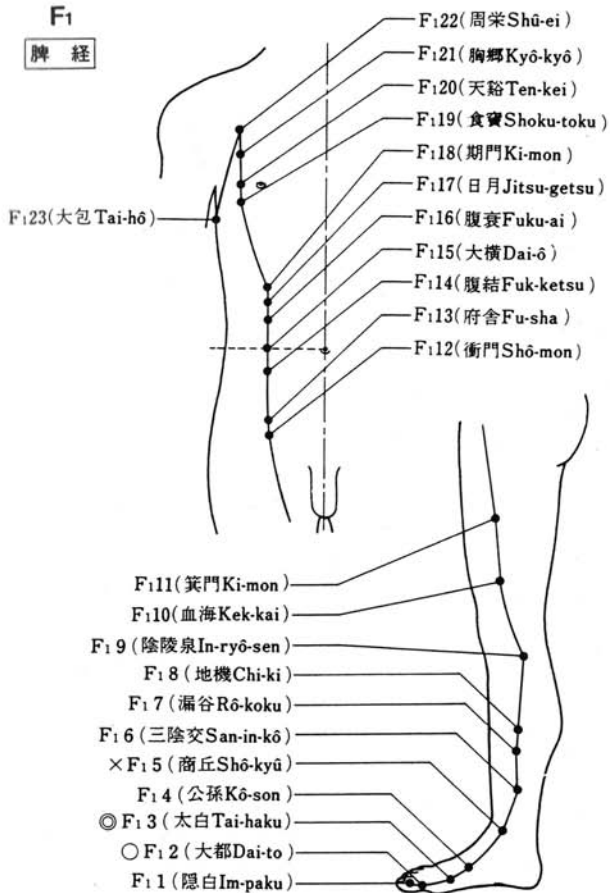
H6

大腸經



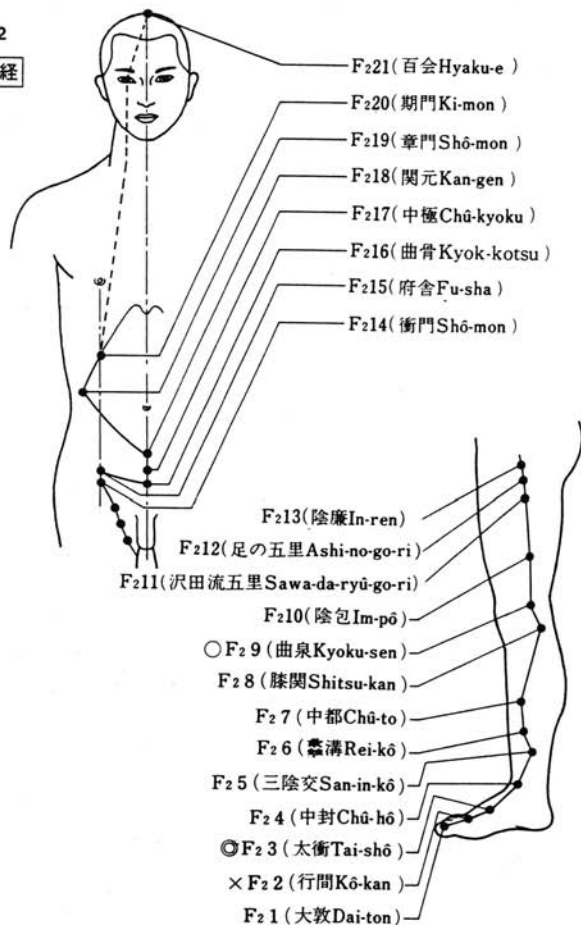
F1

脾經



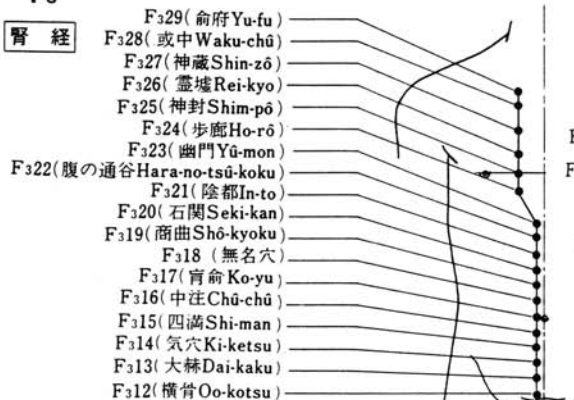
F2

肝經

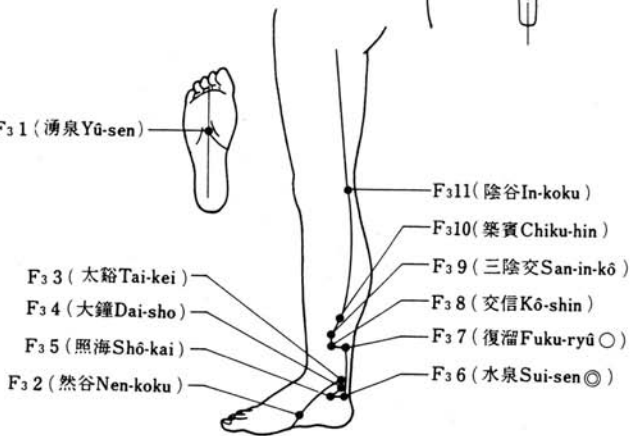


F3

腎 經

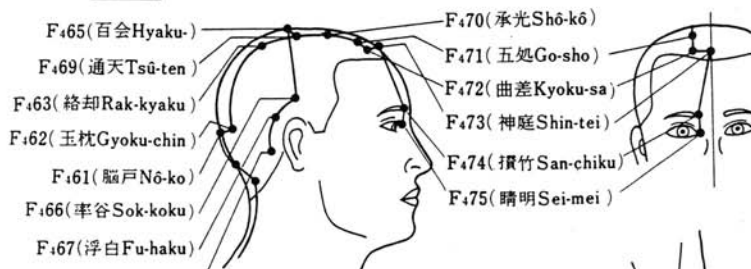


× F₃1(湧泉 Yū-sen)

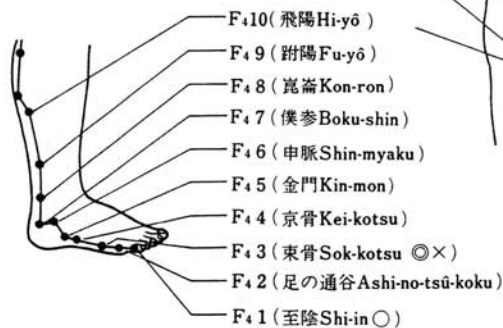


F4

膀胱經 (その1)

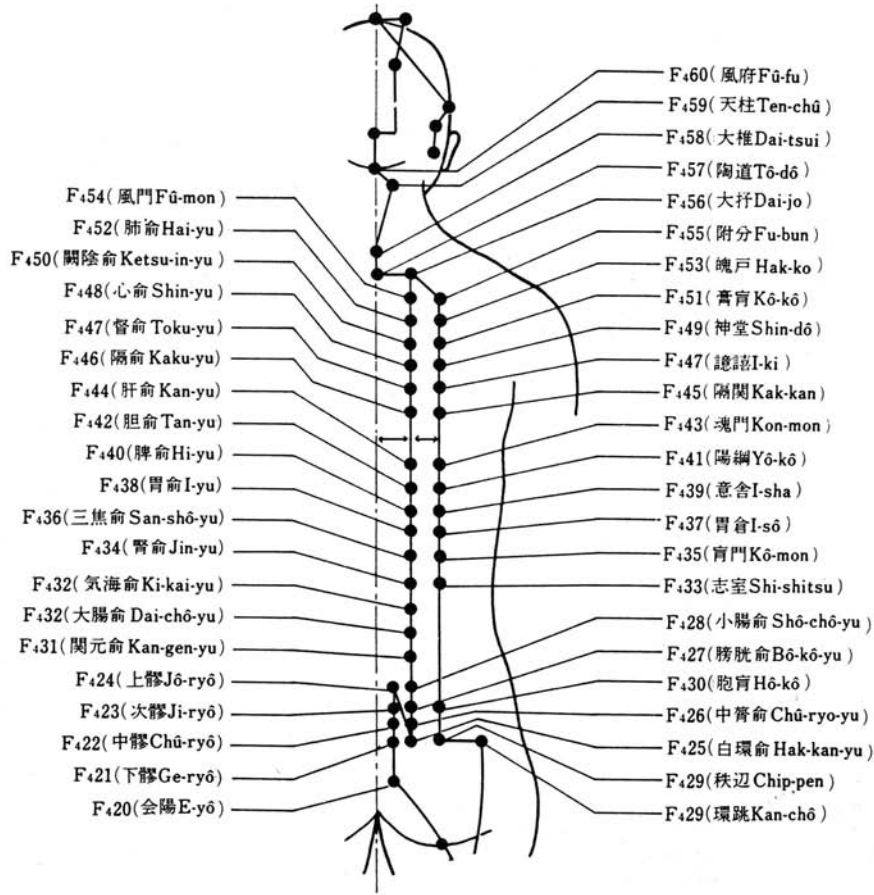


F₄68(頭の窟陰 Atama-no-kyō-in)



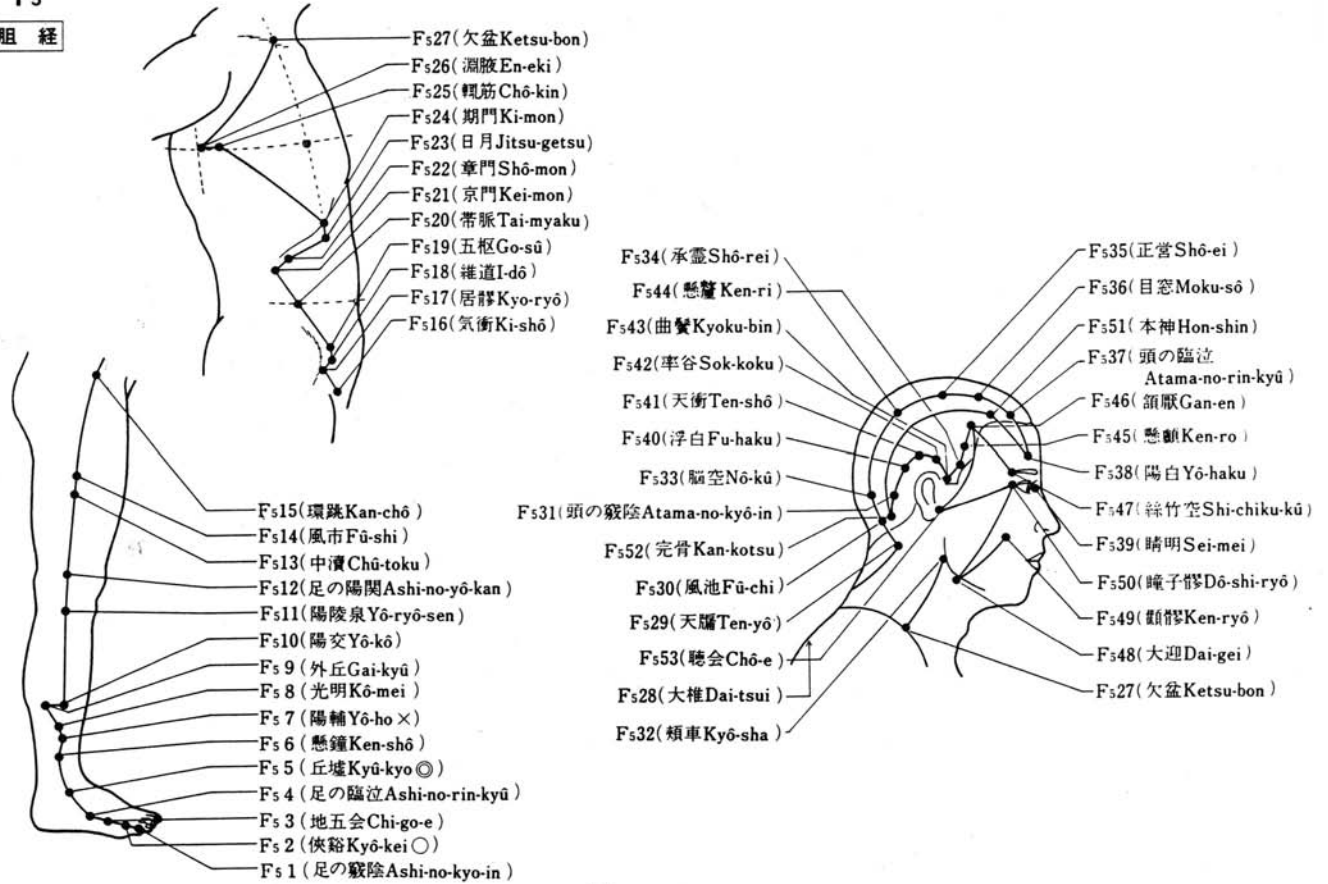
F4

膀胱經 (その2)



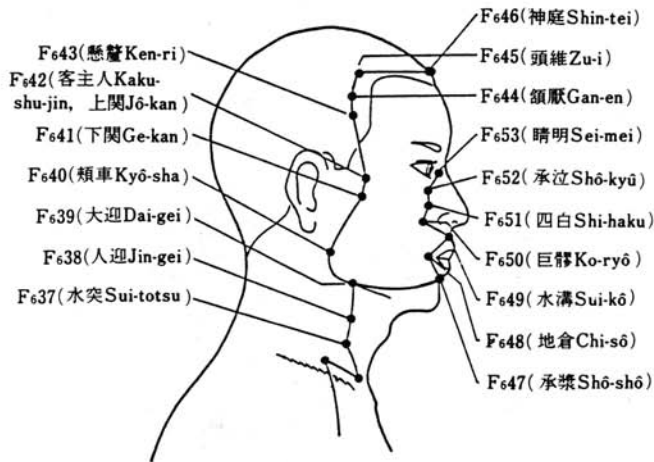
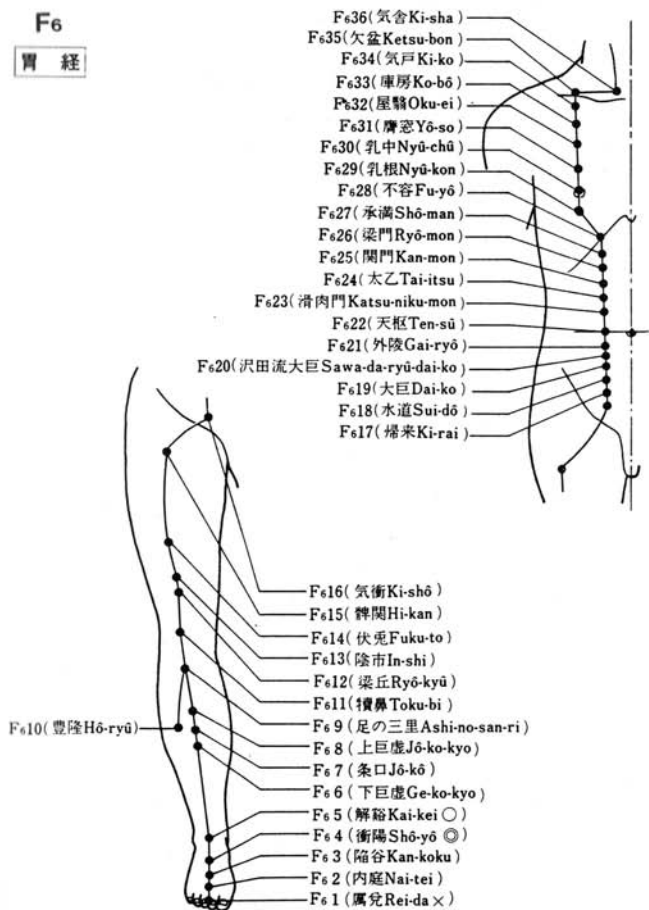
F5

胆 經



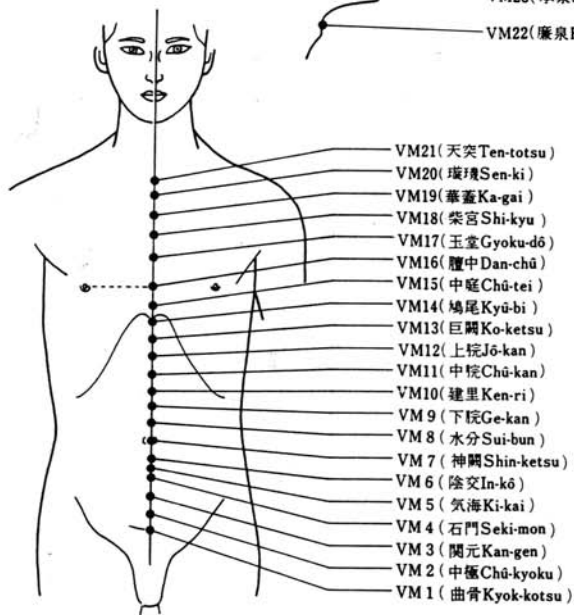
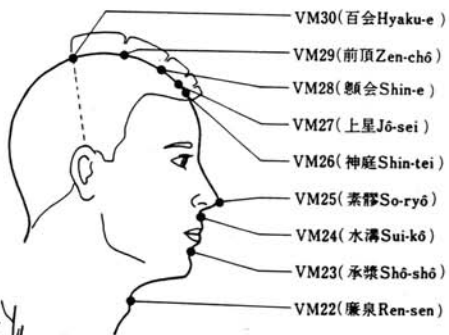
F6

胃 經



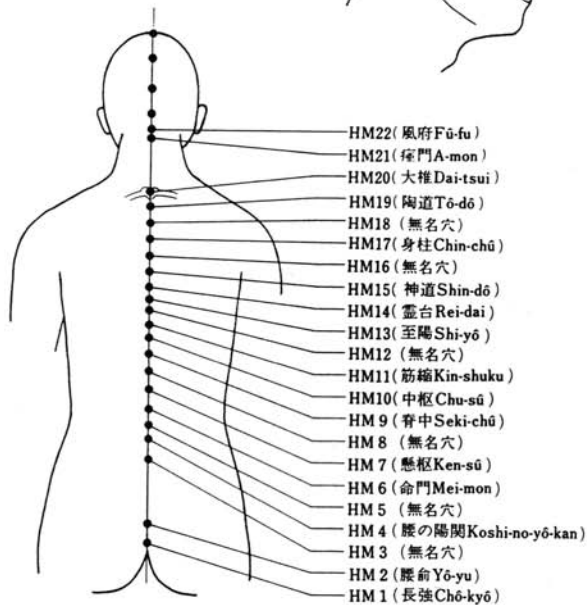
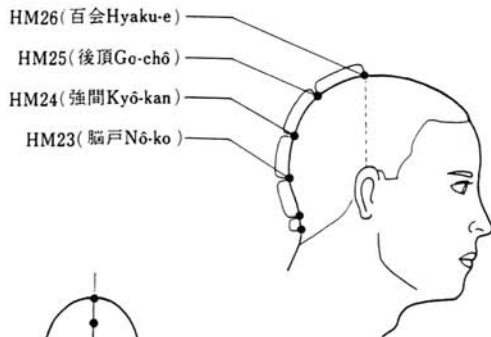
VM

任脈



HM

督脈



ノイロメーターの一般的な使用方法

ノイロメーターは、皮膚の電気抵抗を測定する器械ですが、良導絡理論により次の目的に容易に使用することが出来ます。

1. 反応良導点の探索

神経痛や喘息などの治療のために反応良導点を探索するとき。

2. 良導絡の測定

患者の病状を把握するために良導絡の興奮性を測定するとき。

3. 電気の体内導入

ノイロメーターには弱い電流を使用していますので、電気注射針、電気導入針を使用して、その弱い電流を体内に導入して刺激治療を行うとき。

4. その他の利用法

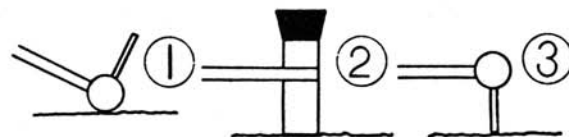
薬物の選択や治療効果を調べたいとき。

以上の4つの目的に、ノイロメーターを使用いたしますが、機種別による特殊な操作方法は別冊に記載することに致しまして、ここではどの機種にも共通の一般的な使用方法を記述いたします。

(1) 反応良導点の探索

反応良導点は皮膚上のその周辺で一番よく通電する点ですから、探索導子（関電極の金属部分）がその上に来た時、メーターの針が一番良く振れるので判ります。機種によっては音を発するもの、音階音を発するものもあります。先ずノイロメーターを可動状態にして、電圧を12Vにし、握り導子を被検者の片手に握らせ、探索導子を検者がもち、次の順序に探索します。

- i 導子を斜めにして、導子の腹部で患部の皮膚上を軽く同圧になでます。メーターの針が小刻みに動く処があればその部分をもう一度ゆっくりなで、一番よく振れる処を確かめます。(①図)
- ii 次に導子を立て、導子が皮膚と接していた部分を横になでて更に位置をたしかめます。(②図)
- iii 最後に一番細い電極で、丸くなでてiiでわかった小円の中を探すと反応良導点が判ります。(③図)



(探索の仕方)

反応良導点が判ると、③の細電極をそのまま皮膚に強く押付けると皮膚に跡がのこります。この跡がきえない

内に印をつけて下さい。そして次の反応良導点をさがします。通常1局所に3～5個位探索します。

注意

冬期又は老令のために12Vで反応良導点が判らないときはボルトをあげます。又夏期などで反応良導点が出すぎるときは6Vにするか、ボリュームをしぼって電流量を少なくします。

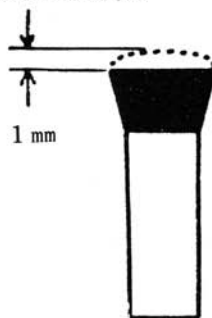
又、反応良導点の探索には通常金属導子を用いますが、金属導子を痛がる患者があります。そんな時には次に示す湿性導子を用いますと痛みません。

(2) 良導絡の測定

患者の病状を知るには、良導絡理論に示されているように、良導絡測定を行います。

反応良導点の探索のときは関電極として探索導子を用いましたが、良導絡測定には**測定導子**を用います。測定導子とは、探索導子と一体になっているエボナイト部を使用するときの呼び方です。即ち、金属部分を使用ときは探索導子と呼び、エボナイト部分を使用ときは測定導子と呼んでいます。探索導子はそのままで使用しますが、測定導子はエボナイトのままでは使用出来ません。内径1cm、長さ1.5cmのエボナイト部の凹部に、水又は生理食塩水を含んだ綿花をつめて用います。この

ように測定導子は水分を導体として使用しますので、**湿性導子**と呼ぶこともあります。綿花のつめ方は、まず綿花に水または生理食塩水を十分にふくませて、軽く指でしぼり、エボナイト部の底部のネジに十分接触させて、図のようにつめます。



綿花のつめ方

エボナイト部よりはみ出さないで、出来るだけ上部を平になるようにします。

準備

- i 測定導子、握り導子を器械にセットします。電圧は12Vに合わせ、スイッチを入れて可動状態にします。測定導子の綿花の部分と握り導子の金属部分とを接触させて、メーターの針が200になるように電流調整器で調節します。
- ii 患者は靴下、手袋などを脱がせ、測定部位（代表測定点）を露出させ、ベッドの上で上体をおこし、両脚を伸ばさせます。

- iii 握り導子を患者の片手に軽く等圧に握らせませす。握る方の手は左右どちらでも結構です。測定中は持ち替えないように注意します。

測定

- i 良導絡測定は必ず左右24個の代表測定点全部を測定し、良導絡カルテに記録します。胃の状態を知りたいだけだとF₆良導絡だけを測っても意味はありません。
- ii 測定の仕方は左手のH₁良導絡から右手のH₁良導絡、左手のH₂良導絡から右手のH₂良導絡と左右交互に、記号数に随ってHからFに順次に測って行きます。

代表測定点は上記のとおりですが、その採り方は次図の通りにします。

- iii 測定条件を一定にするために、測定時間も一定にします。機種によっては自動的に測定時間を一定にしてあるものもありますが、そうでない機種を使用するときは、1, 2, 3 と口の中で数えながら測定します。測定時間は自動機は $\frac{2}{3}$ 秒に合わせてありますが、手動機は1秒以内を目安にして下さい。

カルテの記入の仕方

機種によっては測定と同時に自動的に記入されたり、測定値を読み上げたりするものもありますが、メーター

の指針をたしかめて、その数値を該当欄（左は数字の上に、右は空欄に）に、短い横線を引きます。

カルテの出来上りは次図のようになります。

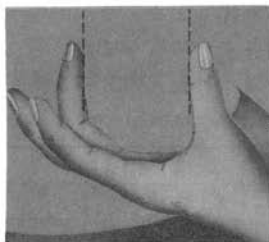
良導絡専用カルテ記入例

良導絡専用カルテ

姓名	殿		生年		年月日		職業		住所		電話														
	姓	名	年	月	日	業	種	住	所	電	話														
測定日時	年	月	日	時	分	秒	測定	度	測定	度	測定	度	年	月	日										
平均電圧	H ₁ 左	H ₁ 右	H ₂ 左	H ₂ 右	H ₃ 左	H ₃ 右	H ₄ 左	H ₄ 右	H ₅ 左	H ₅ 右	H ₆ 左	H ₆ 右	F ₁ 左	F ₁ 右	F ₂ 左	F ₂ 右	F ₃ 左	F ₃ 右	F ₄ 左	F ₄ 右	F ₅ 左	F ₅ 右	F ₆ 左	F ₆ 右	平均電圧
150																									150
140																									140
130																									130
120																									120
110																									110
100																									100
90																									90
80																									80
70																									70
60																									60
50																									50
40																									40
30																									30
20																									20
15																									15
10																									10
5																									5

不詳を凡

代表測定点のとり方

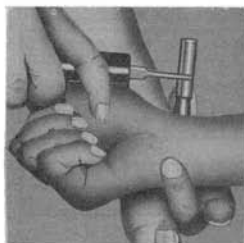


患者の手首に直角に押付けた処が測定点になります。

メーターを読み取る時は導子から指をはなして下さい。
つけていると電流量が多い場合があります。

以上のように致しますと H_1 、 H_3 、 H_4 、 H_6 、良導絡は簡単に測定出来ます。

手の代表測定点をとるには図の様に左手の拇指と中指を平行にして患者の手首の一番細い処を挟みます。手首を指で捲かない様に注意して下さい。拇指、中指に測定導子の側面エポナイト部を摺りつ



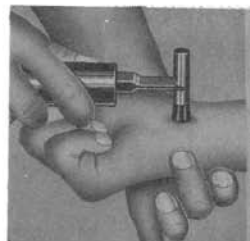
H_1 測定点

反対側の中指の処が H_3 測定点になります。



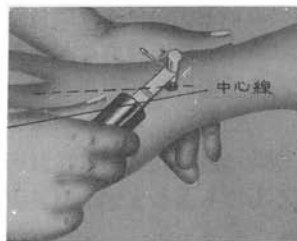
H_6 測定点

反対側の拇指の処は H_4 測定点になります。



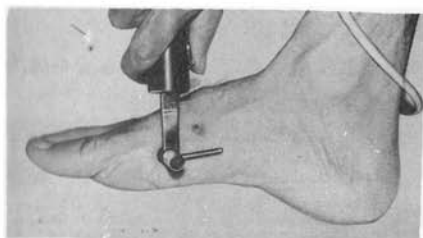
H_2 測定点

H_1 測定点と H_3 測定点との真中になります。丁度中指の線になります。

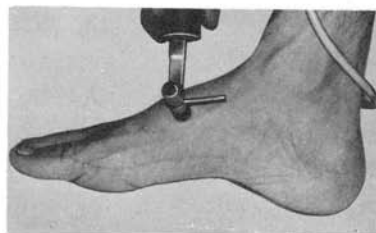


H_5 測定点

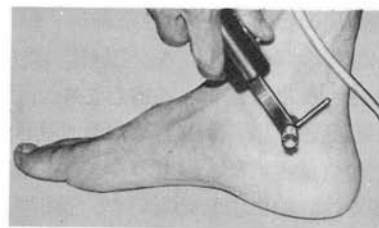
H_4 測定点と H_6 測定点の中間より H_4 測定点寄りになります。くすり指の線です。



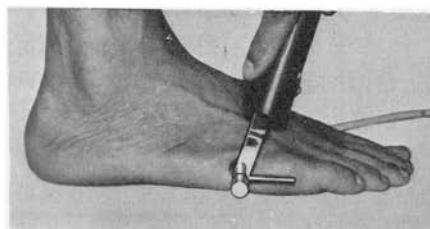
F₁ 測定点
第1指の側面の関節部
につづく



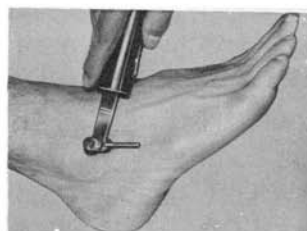
F₂ 測定点
足の甲部突起部の内斜
面



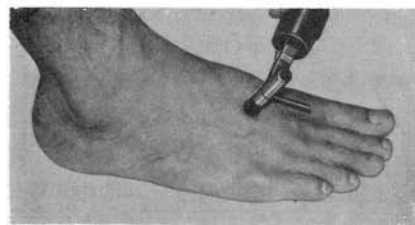
F₃ 測定点
内踝と踵の先端を結ん
だ線と内踝の外周との
交った点



F₄ 測定点
第5指の側面の関節部
につづく



F₅ 測定点
外踝と第4指を結んだ
線と外踝の外周とが交
った点



F₆ 測定点
第2指と第3指の間、
甲の高くなる外辺部

生理範囲の出し方

24ヶ所の代表測定点を全部測定し、カルテに記入が終わると、次に生理範囲を出します。

生理範囲とは、良導絡測定値は病的でなくとも食事その他の生理現象によって多少変化しますが、その変化の限度を統計的に出したもので、測定値の平均が $50\mu\text{A}$ 位のときに $20\mu\text{A}$ を生理範囲としております。その範囲内で変化があっても一応健康であるということになります。また平均値が高くなればなるほど、生理範囲も広がります。反対に低くなれば狭くなります。良導絡専用カルテはこうした変化を考慮に入れて作られておりますので、巾 1.4cm のスケールの中心線（通常中心線は付いていません）を平均値の上ののせて、スケールの上下に線を引くと、その二本の平行線の間が生理範囲になるようになっております。

臨床的にはスケールをカルテの上に真横（縦線には直角に、横線には平行に）において、上下に移動させ、測定値を出来るだけ多くスケールの巾の中に入るようにして、上下に線を引きます。測定値を出来るだけ多く巾の中に入れるためにスケールを斜めにしてはいけません。

又、生理範囲の巾にこだわることなく、上に3つ、下に3～4つ出すようにしても構いません。（前掲図をご参照下さい。）

(3) 電気の体内導入（電気針）

ノイロメーターに使用されている弱い電流を体内に導入して、電気刺激を加えることが出来ます。

電気注射針をノイロメーターにセットしてそのまま使用する方法と、ノイロメーターの探索導子を、神経調整針、昭和針管等の金属部に接触させて通電する方法があります。

標準的な電気導入基準は 12V 、 $200\mu\text{A}$ 、7秒通電であります。機種によって操作は多少異なりますが、どの機種でもこの基準に合わせて下さい。

(4) その他の利用法

病気が治癒するということは自律神経も調整されてきます。ノイロメーターは自律神経の興奮性測定器でありますから、自律神経が調整されたかどうかは良導絡測定を行えば一目瞭然であります。

患者に薬剤を投与して、良導絡測定を行いますと、その薬が有効かどうか知ることが出来ます。投薬の前に良導絡測定を行っておけば、投薬前と投薬後と比較することが出来ます。

同様に他の治療器の効果も知ることが出来ます。

又、注射後の薬液による疼痛の緩解にも利用することが出来ます。

良導絡治療法

患者の良導絡を測定してみますと、ほとんどの場合、良導絡の失調がみられます。それらの患者に良導絡治療を施しますと、だんだんと良導絡が調整されてきて、患者は症状の軽減を告げるようになります。また、神経痛をおこしている部位を探索してみますと、反応良導点を数多く発見することが出来ます。そうした患者でも症状がおさまると、反応良導点も消えてしまいます。勿論、良導絡の失調＝病気、治療＝良導絡の調整、と旨い具合には考えられませんが、多くの疾患が、良導絡理論では自律神経の調整法と考えているところの良導絡治療法によって癒っております。興味深いことは、良導絡治療は、今まで適切な治療法がなかった疾患、例えばベーチェット病だとか、スモン病、てんかん等にも効果を示すことで、特に神経痛、リウマチスなどの除痛治療にはすぐれた効果を示す場合が多いことであります。

良導絡治療法は次の2つからなっております。

1. 全良導絡調整療法
 2. 反応良導点治療法
- であります。

良導絡は左右24とありあって、全身をカバーしております。その全良導絡の興奮性を調整して、疾患を治癒さ

せようというのが全良導絡調整療法であります。内臓の異常が起因としているような疾患、また原因不明の疾患の治療などに適しています。

次に神経痛のように、局所的に自律神経の失調をきたしているような場合、つまり、その症状さえなければ健康であるといったようなとき、又は、過去の経験から反応点がはっきりしているようなときは反応良導点治療を行います。

良導絡も反応良導点も内臓異常の反射であることから考えて、両方の治療法を併用することは効果を高めることとなります。殊に全良導絡調整療法を行ったときは一応反応良導点治療法も試みるべきです。この場合は、先ず全良導絡調整法を先に行います。その後反応良導点治療を局所に行うようにします。

更に良導絡治療は薬物治療と併用しても差支えありません。却って効果を増大することが出来ます。

又、局所注射を行うときは、注射部位として反応良導点を選定した方が効果を増大することができます。

注射後、痛みをのこすような薬液の場合は、薬液注入後、注射針に探索導子をあてて電気を導入しておくと、薬液の吸収がよく、薬液の痛みも緩解します。

次に反応良導点治療法、全良導絡調整療法を詳記いたします。

(1) 反応良導点治療法

反応良導点を探索し、その点に刺激を加えて疾患を治療する方法を反応良導点治療法といいます。この方法は最も一般的な良導絡治療法で、異常感又は疼痛を訴える部位で反応良導点を数ヶ所探索し、刺激します。刺激は通常電気導入による刺激方法を用います。夏期においては多少効果が落ちますが、極めて速効的で、異常感、疼痛は直ちに消失するか、緩解いたします。

軽い症状は1回の治療で消失しますが、そうでないときでも数時間効いております。症状が再現しましても、最初のとときより軽くなっていくことが判ります。もし4～5回治療しても症状が軽減しないときは、全良導絡調整療法に切換えるか、併用して下さい。

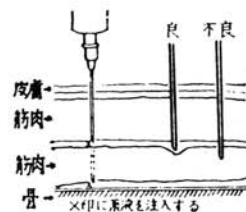
反応良導点治療法は電気を導入する以外に次の方法があります。

① 薬物によって興奮性を遮断する方法

通常神経の興奮性を遮断するには神経を切断するか、麻酔薬を用いる方法がありますが、反応良導点の治療には3%（または2%）塩酸プロカインを注射して遮断します。

注射は図に示す如く反応良導点に垂直に深く筋膜間及び骨膜と筋膜の間に薬液を注入します。薬液量は1カ所に0.2～0.5cc位の少量を注入します。筋膜間が2カ所以

上ある時はそれぞれの筋膜間に注入します。



② 薬物によって興奮性を刺激する方法

自律神経の興奮性を刺激する事も抑制する事も、神経の性質上共に自律神経の調整にはたります。薬物によって刺激するには反応良導点にアストレメジン2号、ビドキシシ、矢追抗原等の特異蛋白質製剤、銀エレクトロイド、白金コロイド等の鉍物製剤等、本来の薬効には関係なく吸収のおそい薬剤を皮内に、0.05～0.1cc位の微量を注射します。

又、フィナルゴン軟膏等の膏薬類をマッチの薬頭大にして貼布するのもよろしい。

③ その他

電磁波、低周波、光線、温熱等によって反応良導点を刺激するのも有効であります。刺激が拡散しないように注意する必要があります。

又、圧刺激は持続性が必要ですので、ギンリュウなど

の金属粒刺激を用います。ギンリュウは電気導入刺激を行ったあとに貼付して刺激の持続化をはかるということも出来ます。

神経痛 反応良導点治療法の最も代表的な適応症であります。先ず患部に反応良導点を見付けて、電気導入法（電気針治療）を行います。治療は1日おきにします。反応良導点は治療が済むと消えますが、翌日は針の瘡口がなおっておらずよく通電しますので、実際の反応良導点を見失うからであります。

1回の治療で完全に痛みをとるようにすれば、大体、3回位の治療で全治します。

プロカイン注射もよくききます。

陳旧な症状には治療後、ギンリュウを貼っておくのも大変効果があります。

五十肩 痛みを訴える姿勢にして反応良導点を求め、そのままの姿勢で電気導入により治療します（主として上膊、肩、肩胛骨部）。治療後1～2分たって又痛みを訴える姿勢をとらせ、もう一度反応良導点を求め再びそのままの姿勢で治療します。1回で完全に痛みが消えるまで治療します。電気導入後はギンリュウ貼付が大へん効果的です。

喘息 喘息には種々の原因が考えられ一律には言えませんが、H₁12及びVM21の三カ所にアストレメジン2

号で刺激します。1カ所に0.1cc位注入します。F₃28も同時に刺激してよい場合もありますが、その他の反応良導点は皮膚反射によっておこっていますから、以上の5点が治療されれば消失します。アストレメジンを使用する時は2日おき3日目位に治療します。またこれらの点にアストレメジンでなく電気導入刺激を行ってもよく効きます。この場合は電気導入後同じ点にギンリュウをはっておきます。

以上で効果がない時はHM17、F₅27、F₄53、F₄52、F₃21、F₂19、F₁20、F₁4、H₁7に電気注射します。之でも駄目な時は良導絡を調整して下さい。

刺激が効いて発作が止まっている間は治療する必要はありません。治療しておりますとだんだん止まっている期間が長くなり、終に癒ってしまいます。又、アストレメジンで効果のない時は刺激方法をかえて下さい。

夜尿症 臍のすぐ下部で反応良導点が4～5カ所あります。之はアストレメジンで刺激して下さい。1回で止まりますが次回漏らすまで治療の必要はありません。又止まらない時は腰部の反応良導点を刺激して下さい。

以上、代表的な反応良導点治療について述べましたが、この治療法には必ず反応不良導点のことを考えながら治療して下さい。そして反応良導点治療で効果のないときは全良導絡調整法に切り換えて下さい。

(2) 全良導絡調整法

すべての疾患は自律神経反射によって反応良導点となっておりますので、反応良導点治療法によってあらゆる疾患を治癒する事が出来る訳です。然し実際には反応良導点治療のみで自律神経を調整すると言う事は、特に慢性疾患等に対して困難であり、又反応良導点の中でもその疾患によって生じている反応良導点でなければ効き目は少ないので、それ等を選択する事も困難な場合が多い訳であります。この様な場合は全良導絡調整法を行います。

全良導絡調整法は速効性と言う点で反応良導点治療にはるかに及びませんが、全自律神経を調整致しますので主訴する疾患ばかりでなく、思わぬ病気が癒ったりして完全な健康を取戻す事があります。従って反応良導点治療によって癒りきらない様な病気、慢性の疾患、成人病、原因不明の病気等に対しては全良導絡調整法を行います。

全良導絡調整法は、はじめに良導絡測定を行います。良導絡測定の結果、良導絡カルテが出来上がりますと、次に不問診をはじめます。

不問診 測定の結果異常良導絡（左右とも生理範囲より飛び出している良導絡、特に生理範囲すれすれに飛び出しているものに気をつけます。）が判りますと、不問診を試みます。不問診は良導絡症候群によって異常良導絡

の症状があるか、ないか患者に質します。あれば陽性であり、無ければ潜在性であります。症候群の症状は統計によっておりますので、全部あると言うものではありません。一つでもあれば陽性と判断します。

治療 次に異常良導絡を刺激して健康体の興奮性（生理範囲の中に入れて良い）になる様に調整するのですが、次のどの一つを選ばれても効果は大差ありません。

- ① 異常良導絡全部+背部6点
- ② 異常良導絡の最高と最低+背部6点
- ③ 異常良導絡の陽性のもの+背部6点
- ④ 異常良導絡の陽性のものの最高と最低+背部6点

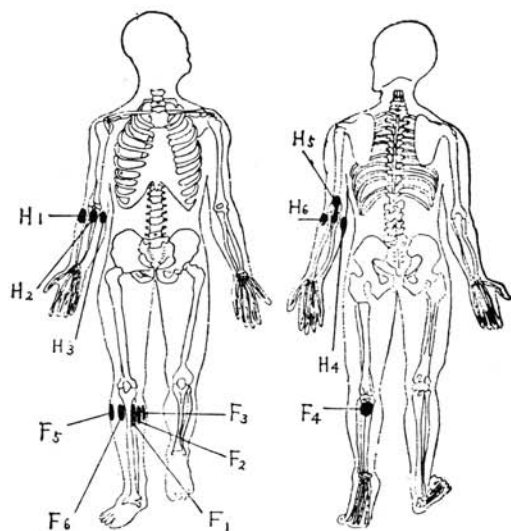
以上の部位を刺激します。

刺激は電気針刺激を2日おきにおこないます。刺激後はそのあとにギンリュウを貼っておきます。10日位経つと測定し直し、異常良導絡の変化をみます。変化がありますと刺激場所を変えねばなりません。常に測定した時の異常良導絡に刺激を加えて下さい。

各良導絡の刺激部位は次図の通りです。自律神経には恒常性がありますから、興奮している場合も抑制している場合も同じ場所に刺激して良い訳です。

良 導 絡 症 候 群

	電流量の病的に多い場合		電流量の病的に少ない場合
H 1	肩のこり・痔・喘息 (のぼせる、咳嗽、咽喉に異常、頭痛、肺が張って汗が出る、肺尖部痛、動悸、肩背痛、小便頻数にして量は少ない、熱気)	鼻 皮膚	呼吸苦しい或は弱い・手足冷え或いはしびれる (皮膚異常、耳鳴り、咽喉乾く、気分が悪い、肩背痛、悪寒)
H 2	心臓・肩のこり・上膊痛 (眼充血)		動悸 (胸苦しい、手掌が熱く感じる)
H 3	胃がはり・便秘 (心臓病、咽喉が乾く、手足重く上肢が冷え、目黄ばむ、手掌が熱い、身熱がある胸苦しい、頭痛、言語障害)	舌・眼	心悸亢進 (言語障害、心臓下部が痛む、上肢が冷え、目黄ばむ、手掌が熱い、下痢、呼吸が弱い、悪寒、不安)
H 4	下腹はる・頭痛・リュウマチス (便秘、頸がはれ廻し難い、口瘡、胸苦しい、身熱、汗が出やすい)	ロイマチス 舌・眼・耳	頭痛・リュウマチス (耳鳴り、難聴、目黄ばむ、下痢、身寒、手足が冷える)
H 5	小便異常・耳鳴 (難聴、下腹堅く、顔面赤く汗が出る、咽喉が腫れる)	耳・眼 肩	つかれやすい(呼吸苦しい、腹がつかえる、微熱)
H 6	肩のこり(歯痛、痔、頭痛、頸や頬が腫れる、満腹感、身熱、咽乾、喘咳、眩暈、手指倦怠、皮膚異常)	皮膚 肩 鼻 口	肩のこり (便通異常、喘息、下痢、咽喉が乾く、耳鳴、気分が落ちつかない、皮膚に異常)
F 1	脛関節炎・胃部異常感・蓄膿 (腹がはる、嘔気、下痢、便秘、足冷え、胸苦しい、食傷)	肋 間 精 神 病	胃弱・脛関節炎(便通異常、疲れやすい、食事がまざり、下痢、嘔気、嘔吐、腹がはる、不眠、黄疸)
F 2	腰痛・不眠・眩暈・眼病 (生殖器病、胸脇苦痛、月経異常、怒る、熱が出たり引いたりする、気分不快)	生 殖 器 間 筋 肉	立ちくらみ・性欲減退 (胃部堅い、小便がもれ易い、視力減退、気力がない、手足無力、脱腸)
F 3	気分が落ちつかない (生殖器病、喘咳、咽喉や舌が乾く、下腹の異常、胸さわぎ、足が熱い、血圧)	耳・脳 生 殖 器	性欲減退・こんきなくつかれやすい・耳鳴・足腰が冷える (物わずれ、聾、手足麻痺、便通異常、眩暈、食不味、体がだるい)
F 4	後頭部にこり・背部異常・腰痛・足神経異常・坐骨神経痛 (頭痛、涙が出る、眼痛、鼻出血、脳病てんかん)	目・耳 鼻・脳	後頭部にこり・背はり・腰痛・足神経異常、坐骨神経痛・足がだるい(足痛、痔、背部悪寒、脚気)
F 5	頭重・口苦・口乾(頭痛、食欲不進、怒りやすい、嘔逆、悪寒、発熱、汗出)	頭 部 眼 筋 肉	眩暈・目に力がない (手足が重い、よろめく、溜息、目黄ばむ、顔に元気がない、血圧)
F 6	関節腫痛 (乳腺炎、口唇乾、食欲異常亢進、熱があっても汗が出ない)	精 歯 口 神 鼻 眼	憂うつ (あくび、顔面浮腫、食欲減、口唇乾、腹鳴腹痛、手足重く、悪寒、下痢)



良導絡調整点
電気針刺激点

尚、以上の部位の替りに前述の興奮点、抑制点を用いて刺激するのは更に効果がある訳ですが、その部位が電気針刺激に適しないところが多いので、敢て興奮点、抑制点を利用する必要はありません。上図の部位のあたりで反応良導点を求めて刺激して貰えば結構です（反応良導点でなくても可）。

又、背部6点とは背中のF₄（膀胱）良導絡上のF₄44、F₄40、F₄34 左右6カ所を言います。各々の部位は、肝臓、胃、腎臓、副腎に関係のある良導点です。

刺激の方法は電気注射針又は椎円電流導入器を用いて1カ所200 μ A 7秒間ずつ刺激します。従って最小限10カ所は刺激する事になります。

通常は良導絡の調整と同時に対症療法として反応良導点治療も行いますが、又投薬治療の併用も一層効果があります。

また、良導絡の調整に興奮点・抑制点を用いる場合は、興奮している異常良導絡には抑制点に、麻痺している異常良導絡には興奮点に刺激します。電気注射法が発見されてからは、こうした興奮点・抑制点を用いる方法はほとんど必要がなくなりました。即ち簡単に全良導絡調整療法を行うことが出来るようになりました。

良導絡治療につきましては、下記の著書をご参考願えれば、尚一層よくご理解いただけると思います。

中谷義雄著 良導絡自律神経調整療法
" 最新良導絡臨床の実際
" 良導絡治療の詳解

又、良導絡治療は疼痛除去の目的ばかりでなく、自律神経系の調整を支柱とする、医源病の心配のない治療法でありますので、老成人病対策、難病対策として臨床医家に巾広く注目されております。

